

清流の息吹を訪ねて

未来へ続くオイカワ(小粒)たち

く観察から学ぶ生態系のバランスく

このコーナーは、市内山ノ内釣りに関するアドバイスなどを行う(株)フィッシュナビの代表で、「魚の専門家」の八鳥洋二さんからご寄稿いただいています。

梅田川のオイカワを観察していて感動したのは、幼魚く成魚(親魚)まで、さまざまな大きさの魚が棲んでいたことです。これは繁殖や生息環境がシツカリ整っている証拠でもあります。流れの緩やかなところをみると、今年の生まれた幼魚たちが、大きさは僅か2く3センチと小粒ながらも逞しく生きています。

こんな身近な川にもさまざまな生



オイカワの稚魚たち。砂底と同化しており、影がなければ見つけることは非常に難しい

き物が生息し、まさに弱肉強食の世界ですが、すべての生物たちが互いに影響し合いながら絶妙なバランスで生態系が保たれているのですね。

自然界ではごく当たり前の光景ですが、人間が「過剰」に介入すると生態系の秩序はいとも簡単に壊れることを(過去の経験から)私たちが学び、理解しなければなりません。

今でこそ魚の豊かさを象徴する川ですが、30年前にこの記事を書くことは不可能でした。なぜならこの梅田川をはじめ市内を流れる多くの河川はドブ川で、生き物が棲める環境ではなかったからです。それ故に当時を知る人(私も含め)は、川を見ることすらしなかったでしょう。下水道の普及で徐々に水質が改善し、近年になってやっと多くの魚が棲めるようになったのです。やはり魚が棲んでないと川らしくありませんね。